

古期英語強変化動詞の類別定義と韻構造

—基本型と変異型—

岩 本 忠

目 次

はじめに

- 1) ゲルマン語段階の強変化動詞語形の定義
- 2) 母音交替系列による類別分類
- 3) 古期英語強変化動詞の類別分類
 - 3.1) 母音交替系列
 - 3.2) 基本的語幹構造
 - 3.3) 基本型
 - 3.4) 変異型
1. 古期英語強変化動詞の語構造
2. 古期英語強変化動詞の類別基準
3. 基本型
 - 3.1 重語幹類（第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ類）
 - 3.2 軽語幹類（第Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ類）
 - 3.3 畳音類（第Ⅶ類）
4. 変異型
 - 4.1 音声的変異
 - 4.1.1 VL型（第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅴ類）
 - 4.1.2 縮約型（第Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ，Ⅵ，Ⅶ類）
 - ・縮約語 *sēon*, *sion*; *tēon*, *tion* の類似形について
 - 4.1.3 音位転換型（第Ⅲ類）
 - 4.1.4 /ū/ 一現在型（第Ⅱ類）
 - 4.2 語彙形態論的変異
 - 4.2.1 アオリスト現在型（第Ⅲ，Ⅳ類）
 - 4.2.2 弱現在型（第Ⅴ，Ⅵ類）
 - 4.2.3 畳音型（第Ⅶ類）
5. 類別語構成：基本形と変異型の一覧表
6. 韻構造
7. 結 語
- 参考文献
- 英文抄

キーワード：古期英語，強変化動詞，類別定義，韻構造，基本型と変異型

はじめに

古期英語（およそ700年から1150年頃まで）の動詞の種類は，母音交替により活用する「強

変化動詞」(ridan, singenなど)と、歯茎音(-t/de)接辞により活用する「弱変化動詞」(bringan, sendanなど)と、「過去現在動詞(あるいは完了現在動詞)」(cunnan, maganなど)と、そのいずれにも属さない少数の「不規則動詞」(bēon, willanなど)とがある。

「強変化動詞」という名称はJ. Grimm (1819: I. 558)によって名付けられ、その後、諸氏によってとりあげられてきた。強変化動詞は今日、七類があるとされるが、その分類の定義はF. van Coetsem (1956: pp.8-14)の基本的類別の型およびC.F.P. Stutterheim (1960. *Lingua* 9, 237-57)の補説、そしてC. Karlstein (1921)の畳音語形論【第Ⅶ類】によって、確定的な論議の基ができた。その論は、ゴート語(および古ノルド語)の言語資料を中心にした原ゲルマン語レベルであり、ゲルマン諸言語に関するこの分野での探求は、このゲルマン語段階の枠をもってなされてきた。

英語の強変化動詞に関する記述も、諸文献の中に見られるが、このゲルマン語の型枠を所与のものとして、それに相当する語をいれて論じてきた。ゲルマン諸言語におけると同様に、英語においても強変化動詞は英語固有の音声および語彙環境による変異をもち、基本形の活用をするものもあれば変異の形をもって活用をするものもある。

本稿は、古期英語の言語資料をもって、「基本型と変異型」の二つに分けて、その各々の実態を網羅的かつ体系的に整理することを目指し、今一度、英語強変化動詞各々の構成要因の検証を行なうものである。本稿はまた、強変化動詞に関して言語使用者(話者)がもつ語形意識は、その韻構造にあるとみる。Drifan, scrifanには[-if](母音間-f-の発音は[-v-])があり、それがMnE.strive/ strove/ strivenにつながってゆく。韻構造は共時的語形活用の基盤となるとともに通時的変遷においても強変化活用の維持、新語の強変化化に作用する語形的基盤となる。ここにその韻構成をも追究した。

1) ゲルマン語段階の強変化動詞語形の定義

Definition of Strong Verb Word Forms in Gmc Level

F. van Coetsem (1956: pp.8-14)は、強変化動詞の基本的類別は、活用語幹の型によるとして、次のように原ゲルマン語(Urgermanisch)の型を5つの類型に分けた

1. e+i+Konsonant;
2. e+u+Konsonant;
3. e+Liquida/Nasal+Konsonant oder
e+doppelte Liquida/doppelter Nasal,
gegebenfalls auch doppelter Konsonant;
4. e+Liquida/ Nasal;
5. e+Konsonant.

それが各類内部で「現在／過去」の母音交替を[ei/ai], [eu/au]のようにすると説く。「1」

の類に相当する *ridan* (=to ride) ならば, [*ridan/ rād/ ridon/ riden*] の母音 [*i/ ā/ i/ i*] はPGmc [*ii/ aa/ i/ i*] < PIE [*ei/ oi/ i/ i*] に遡ると推定される。従って, [*e+i*+子音] の語幹核をもつことになる。

さらに彼は

1, 2, 3類を「第Ⅰ部」として [*e+Sonant+Konsonant*] あるいは [*e+Konsonant+Konsonant*]

4, 5類を「第Ⅱ部」として [*e+Sonant*] あるいは [*e+Konsonant*]

と集約できるとした。Sonantは亮音/*i, u, l, r, m, n*/のことである。彼はまた、畳音の類にも言及している。

2) 母音交替系列による類別分類

Classification of the Strong Verb with Ablaut Series

強変化動詞はその母音交替系列 (Ablaut series) により, 上記の5つの類に加えて, 第4類と第5類が混合した第6の類, および畳音の類, の七つの類に分けられる。そのゲルマン語段階での母音交替系列はR.M. Hogg (1992: p.151) によれば, 次の通りである:

[現在: 不定詞・現在幹; 過去1: 過去単数1, 3人称形; 過去2: 過去単数2人称・過去複数形; 過分: 過去分詞形]

	現在	過去1	過去2	過分
第Ⅰ類	i	ai	i	i
第Ⅱ類	eu	au	u	o
第Ⅲ類	e	a	u	o
第Ⅳ類	e	a	ǣ	o
第Ⅴ類	e	a	ǣ	e
第Ⅵ類	a	ō	ō	a
第Ⅶ類	(語構造が畳音に関係するもの)			

3) 古期英語強変化動詞の類別分類 Classification of OE Strong Verbs

3.1) 母音交替系列 Ablaut Series

各個の言語において母音交替系列はその固有の環境条件により, 上記の原ゲルマン語から発展した状況にある。Hogg (ibid.: p.152) はまた, 各類の基本的母音交替系列を「[古期英語のものとは明示せず], 次のようにあげている [過去分詞第Ⅳ類eと第Ⅴ類oはその論拠をあげていないが, o, eのミスプリントか]:

	現在	過去1	過去2	過分
第Ⅰ類	i	ā	i	i
第Ⅱ類	ēo	ēa	u	o
第Ⅲ類	e	ae	u	o
第Ⅳ類	e	ae	æ	e
第Ⅴ類	e	ae	æ	o
第Ⅵ類	æ	ō	ō	æ
第Ⅶ類	(語構造が畳音に関係するもの)			

3.2) 基本的語幹構造 Fundamental Word Base Structure

強変化動詞の主要な構成要因は母音交替系列である。さらに、母音交替系列と表裏一体の関係をなすものに語幹構造がある。

現実の言語生活において、母音交替によって個々の動詞の過去形と過去分詞形をつくるとき(即ち、原形の母音とは異なる母音をもちいて過去、過去分詞をつくるとき)、話者の心理はその「語幹構造の枠」を拠り所とするところが大きい。動詞の「語構造」の基盤は、現在形・不定詞形の語幹構造「古典語でいうところの現在幹」であり、各類はそれを基本型構造(proto-typical structure)としてもつ。更に、それぞれの基本形(proto-typical forms)から派生して、縮約やVL変異など一定の条件による変異形(variant forms)が生じる。そこにはまた、類推、借用、移行などの変転現象がある。並行して、それぞれは各類に相応した「母音交替系列(Ablaut series)」をなす。

3.3) 基本型 Proto-Types

古期英語の強変化動詞300余語の不定詞語形を検証し、その表記を定式化すると、各類は次のような基本型構造をもつことが認められる。

第Ⅰ類	[CVaVaC-] (-VaVa-は長母音を示す)
第Ⅱ類	[CVaVbC-] (-VaVb-は二重母音を示す)
第Ⅲ類	[CVRC-] (Rは亮音/l, r, m, n, /を示す)
第Ⅳ類	[CVR-]
第Ⅴ類	[CVC-]
第Ⅵ類	[CVC-/CVR-] (第Ⅳ類型・第Ⅴ類型動詞の混成である)
第Ⅶ類	(語構造が畳音に関係するもの)

これはFr. van Coetsem (1956: pp.8-14) の定式を、より抽象化して古期英語の各類の本質を表わすものである [Iwamoto 1999/2003²: p.28]。

3.4) 変異型 Variant Types

変異形を点検すると、各基本型を基盤にして、音声的変異と語彙形態論的変異とが生じているのがみとめられる。それには次の諸型がある。

音声的変異（VL型，縮約型，音位転換型，/ū/型）
 語彙形態論的変異（アオリスト現在型，弱現在型，畳音型）

各類においては、変異型は次のように現れている。

- 第Ⅰ類には 「VL型，縮約型」
- 第Ⅱ類には 「VL型，縮約型，/ū/型」
- 第Ⅲ類には 「VL型，音位転換型，アオリスト現在型」
- 第Ⅳ類には 「アオリスト現在型」
- 第Ⅴ類には 「VL型，縮約型，弱現在型」
- 第Ⅵ類には 「VL型，弱現在型」
- 第Ⅶ類には 「畳音型，縮約型」

1. 古期英語強変化動詞の語構造 Word Structure of OE Strong Verbs

古期英語強変化動詞語幹の基本構造は

「子音+母音+子音-」 (/C₁VC₂-/)

である。これに活用語尾がついて /rid-an, rād, rid-on, rid-en/ のような語形を成す。また、語によっては接頭辞がつく（それには非分離形 ā-, be-, ed-, for-, ful(l)-, ge-, mis-, of-, on-, oþ-, to-と、アクセントによっては分離可能な形 æt-, ofer-, þurh-, under-, wip-, wiper-, ymb(e)-とがある）。

語幹頭音の/C₁/は比較的他からの音的影響をうけないが、語幹末音/C₂/はアクセントや隣接音の音質に影響されて、特に軽語尾と重語尾の差異により変音することがある。これが変異形を生む原因となる。

強変化動詞においては、不定詞は語尾/-an/をもち、過去1形は/ゼロ/、過去2形は/-on/、過去分詞は/-en/を語尾にもち、その4形の枠ごとに母音交替をする。したがって、その語構造は次のようになる。

〈注：「過去1形 (Preterit 1)」は過去単数1, 3人称形を；また「過去2形 (Preterit 2)」は過去単数2人称および過去複数形を指す。Lass & Anderson: 1975以来の呼称〉

現在不定詞	/CV _α C-an/	(例, rid-an)
過去1形	/CV _β C#/	(例, rād)
過去2形	/CV _τ C-on/	(例, rid-on)
過去分詞	/CV _δ C-en/	(例, rid-en)

ここで母音交替系列は/V_α, V_β, V_τ, V_δ/ (例, /i, ā, i, i/) を指す。

2. 古期英語強変化動詞の類別基準

Classifying Criteria of OE Strong Verbs: Proto-typical Forms

OE強変化動詞はゲルマン語学の伝統にしたがって7つの類に分類される。その類別基準は、それぞれの語幹形態（語幹構成）と母音交替系列の如何による。それが各類の基本語幹形態、即ち「基本型」を規定する。各類にはまた、音声的変異や語形成要因により基本語幹形態から派生した「変異型」がある。

各類の基本的語幹構成と母音交替系列は次の通りである。

(1) 不定詞語幹母音が「長母音 (VaVa)」か「二重母音 (VaVb)」か「母音+亮音 (VR)」かという重いものを重語幹型 (Heavy Base Type) の類として、それぞれを [第Ⅰ類] [第Ⅱ類] [第Ⅲ類] に分ける。

(2) 語幹母音が「短母音」であるものは軽語幹型 (Light Base Type) の類とする。その語幹末音/C₂/が亮音（流音・鼻音 /R/）か否（非流音・非鼻音 /C/）かにより [第Ⅳ類] と [第Ⅴ類] に細分する。その両者において混同が起り、語幹形態よりも母音交替系列を優先した分類による類（母音交替系列を同じくする動詞群）が混合類 [第Ⅵ類] である。

(3) それとは別に「(ゴート語において) 畳音を用いて過去形を作る動詞群」がある。これを畳音類 (reduplicated class) と称し、[第Ⅶ類] とする。古期英語ではその過去形母音により、「a」[ē] 型と「b」[ēo] 型とに分ける（このa・b 分類のあり方は言語により異なる）。

3. 基本型 Proto-Types of the Class

類別基本形一覧 これにより、各類の基本形態は次のような「語幹構成」(C：子音, V：母音, R：亮音, N：鼻音, L：流音) と「母音交替系列」をもって規定される。ここにその語幹構成と母音交替系列とともに、それぞれの語例をあげる。

韻構造 (Rhyme Structure) 各類の項目においては, *bidan*, *ridan*, *slidan*; *crēopan*, *drēopan*; *crincan*, *drincan*, *sincan*; *bindan*, *findan*, *windan*; *ceorfan*, *deorfan*, *steorfan* のように語形が同韻の形態をもつ。その韻構成は各個の項において示す。ここでいう「韻」(rhyme) とは、語

幹音節の主母音と末音/-VC₂/を指す。その韻を構成する型 [-id], [-ēop], [-inc], [-ind], [-eorf] など、この章の各項目の冒頭にあげることにする。強変化動詞の使用にかかわる話者の語形意識 (word shape) はこのレベルにあると考えられる。

3.1 重語幹類 Heavy Base Classes

- ・第Ⅰ類基本型：/CVaVaC-/ [CiC-] ridan (= to ride) / i, ā, i, i /

47語があり, ridan/ rād/ ridon/ riden と活用をする。

1. bīdan	2. bītan	3. blican	4. cīnan	5. clifan, æt-
6. cnīdan	7. cwīnan, ā-	8. drīfan	9. dwīnan	10. flītan
11. gīnan, on-	12. glīdan	13. gnīdan	14. grīpan	15. hlīdan, be-
16. hnīgan	17. hnītan	18. hrīnan	19. hwīnan	20. lifan, be-
21. mīgan	22. nīpan	23. ridan	24. ripan	25. scīnan
26. scītan, be-	27. scrīfan	28. sīcan	29. sīgan	30. slīdan
31. slīfan, to	32. slītan	33. smītan	34. snīcan	35. spiwan
36. strīcan	37. strīdan	38. swīcan	39. swīfan	40. þwīnan
41. þwītan	42. wīcan	43. wīgan	44. wītan, æt-	45. wlītan
46. wrīdan	47. wrītan			

ここに韻構造をなすものとして次の韻構成をみることができる。

韻構成： [-ic] [-id] [-if] [-ig] [-in] [-ip] [-it] [-iw]

- ・第Ⅱ類基本型：/CVaVbC-/ [CēoC-] bēodan (= to bid) / ēo, ēa, u, o /

25語があり, bēodan/ bēad/ budon/ boden と活用をする。

1. bēodan	2. brēotan	3. brēowan	4. cēowan	5. clēofan
6. cnēodan	7. crēopan	8. drēopan	9. flēotan	10. gēopan(-ū-)
11. gēotan	12. hlēotan	13. hrēowan	14. lēodan	15. lēoran
16. nēotan	17. rēocan	18. rēodan	19. rēotan	20. scēotan
21. smēocan	22. snēowan	23. sprēotan(-ū-)	24. þēotan(-ū-)	25. þrēotan, ā-

韻構成： [-ēoc] [-ēod] [-ēof] [-ēop] [-ēor] [-ēot] [-ēow]

- ・第Ⅲ類基本型：/CVRC-/

第Ⅲ類は語幹構成により規定される類である。これにはN基本型, L基本型1, L基本型2, の三つの基本型がある。

この類は本来/e, æ, u, o /であるが, N基本型 [CiNC-] は, その交替母音を後続の鼻音/n, m/の影響により/e/>/i/, /o/>/u/と上舌化し, /æ/を広口/a/にした。故に/i, a, u, u/である。

L基本型の「1」と「2」は現在幹母音が/e/か/eo/か, 語幹末音が/l/か/l, r/かという点で異なる。過去1形で, 本来の/æ/は流音の前で音分割 (breaking) を起こして/ea/となった。

このように, 第Ⅲ類は, N, L1, L2と分岐して類崩壊を起こし始めているとの印象を受けるが, その連携は連続的であり, 体系は維持されている。[参考: This leads one to suppose that class III was already breaking down in the OE period, except for the *bindan*-type, yet we may be being misled by the situation in West Saxon, which showed a rather greater variation than did the other dialects. Hogg. 1992: p.154.]

・第Ⅲ類N基本型: [CiNC-] *bindan* (=to bind) / i, a, u, u /

N基本型は母音が/i/で鼻音/m, n/を後続させ, *bindan*, *drincan*など38語があり, *bindan*/ *band*/ *bundon*/ *bunden*と活用し, その多くが現代英語にまで続く語形の安定した語群である。

- | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|---------------------|--------------------|
| 1. <i>bindan</i> | 2. <i>bi(e)rnan</i> , <i>brinnan</i> | 3. <i>climban</i> | 4. <i>clingan</i> | 5. <i>crimman</i> |
| 6. <i>crincan</i> | 7. <i>cringan</i> | 8. <i>cwincan</i> , <i>ā-</i> | 9. <i>drincan</i> | 10. <i>findan</i> |
| 11. <i>ginnan</i> , <i>on-</i> | 12. <i>grimman</i> | 13. <i>grindan</i> | 14. <i>hlimman</i> | 15. <i>hrindan</i> |
| 16. <i>limpan</i> , <i>ge-</i> | 17. <i>linnan</i> | 18. <i>rinnan</i> , <i>iernan</i> | 19. <i>scrincan</i> | 20. <i>sincan</i> |
| 21. <i>singan</i> | 22. <i>sinnan</i> | 23. <i>slincan</i> | 24. <i>slingan</i> | 25. <i>spinnan</i> |
| 26. <i>springan</i> | 27. <i>stincan</i> | 28. <i>stingan</i> | 29. <i>swimman</i> | 30. <i>swincan</i> |
| 31. <i>swindan</i> | 32. <i>swingan</i> | 33. <i>þindan</i> | 34. <i>þringan</i> | 35. <i>þrintan</i> |
| 36. <i>windan</i> | 37. <i>winnan</i> | 38. <i>wringan</i> | | |

なお, *biernan* (*brinnnan*) と *rinnan* (*iernan*) には過去1, 2形に/-o-/ (*born*, *orn*, *ornon*, *ornen*) 形もある。

韻構成: [-imb] [-imm] [-inc] [-ind] [-ing] [-inn] [-int]

・第Ⅲ類L基本型1: [CeLC-] *helpan* (=to help) /e, ea, u, o /

L基本型1は現在幹母音が/e/で流音/l/を後続させ, *belgan*, *swellan*など12語あり, *helpan*/ *healp*/ *hulpon*/ *holpen*と活用。

- | | | | | |
|--------------------|--------------------------------|------------------|-------------------|--------------------|
| 1. <i>belgan</i> | 2. <i>bellan</i> | 3. <i>delfan</i> | 4. <i>gieldan</i> | 5. <i>giellan</i> |
| 6. <i>gielpa</i> n | 7. <i>helpan</i> | 8. <i>meltan</i> | 9. <i>swelgan</i> | 10. <i>swellan</i> |
| 11. <i>sweltan</i> | 12. <i>teldan</i> , <i>be-</i> | | | |

gieldan, *giellan*, *gielpa*nの/ie/はWestSaxon方言特有の音分割 (breaking) である。

韻構成： [-eld] [-elf] [-elg] [-ell] [-elp] [-elt]

・第Ⅲ類L基本型2： [CeLC-] weorpan (“to throw”) /eo, ea, u, o/

L基本型2は現在幹母音が/eo/で流音/l, r/を後続させ, beorcan, sceorpanなど16語あり, weorpan / wearp/ wurpon/ worpenと活用。feohtanは語形からして本来は第Ⅴ類の動詞であるが, 母音交替系列がこの類である。

- | | | | | |
|-----------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. beorcan | 2. beorpan | 3. ceorfan | 4. deorfan | 5. feohtan* |
| 6. fēolan | 7. hwerfan | 8. meolcan | 9. sceorfan | 10. sceorpan |
| 11. seolcan, ā- | 12. smeortan | 13. steorfan | 14. sweorcan | 15. sweorfan |
| 16. weorpan | | | | |

韻構成： [-eolc] [-eolh] [-eorc] [-eorf] [-eorg] [-eorp] [-eort] [-eoht]

3.2 軽語幹類 Light Base Classes

・第Ⅳ類基本型：/CVR-/ [CeL-] beran (=to bear) /e, æ, æ, o/

これにはstelan, teranなど8語と, 第Ⅴ類/CVC-/型から移行してきた2語breca*, hleca* (下記の「注記」参照) があり, beran/ bær/ bāron/ borenの母音交替をする。

- | | | | | |
|-----------|--------------|-----------|----------|------------|
| 1. beran | 2. breca* | 3. cwelan | 4. helan | 5. hleca* |
| 6. hwelan | 7. sc(i)eran | 8. stelan | 9. teran | 10. þweran |

韻構成： [-el] [-er] [-(l/r)ec]

・第Ⅴ類基本型1：/CVC-/ [CeC-] metan (=to measure) /e, æ, æ, e/

これにはetan, sprecaなど12語があり, metan/ mæt/ mæton/ metenと活用。

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. cnedan | 2. drepan | 3. etan | 4. metan | 5. plegan |
| 6. screpan | 7. spreca | 8. swefan | 9. tredan | 10. wefan |
| 11. wegan | 12. wreca | | | |

韻構成： [-ec] [-ed] [-ef] [-eg] [-ep] [-et]

・第Ⅴ類基本型2：/CVC-/ [C ie C-] giefan (=to give) /ie, eo, ēo, ie/

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. giefan | 2. gietan |
|-----------|-----------|

韻構成： [-ief] [-iet]

これにはOld Norseの影響を受けたこの二語がある。OEの不定詞現在幹母音は/ie/であるが、/e/に由来する。即ち、そのゲルマン諸語対応形の主母音は/e/である [OFr., OSa., OHG., ON./e/]。故に、第V類に属する。Seebold 1970によれば、そのGmc対応形は次の通りである。

1. giefan

ae.	giefan, geaf, gēafon, giefen
afr.	-ieva, ief, iēvon, ieven
as.	geban, gaf, gābun, gígeban
ahd.	geban, gab, gābun, gígeban
awn.	gefa, gaf, gófo, gefenn
gt.	giban, gaf, gebun, gibans

2. gietan

ae.	-gietan, -geat, -gēaton, -gieten
afr.	-jeta, ----, ----, -ieten
as.	-getan, ----, -gātun, ----
ahd.	-gezzan, -gaz, -gāzun, -gezzan
awn.	geta, gat, góto, getenn
gt.	-gitan, -gat, -getun, -gitan

本稿のデータは両語ともOE. ie, eo, ēo, ieで文証形である。その母音は現在形、過去分詞形が/ie/で、過去1形 /eo/（北部方言に/a/あり、上記「1型」に対応）、過去2形/ēo/とともに第V類としては特異である。唯、その語幹構成が/CVC-/であるために第V類型となる。

[注記：brecanとhlecan]

ここで、第V類から第IV類へと類別の枠を超える移行をした動詞brecan (=to break) とhlecan (=to unite) について特記する。第IV類と第V類の母音交替系列の差異は過去分詞母音が/o/か/e/かという点にある。ところがこの2語は不定詞現在幹が第V類型 [CeC-] でありながら、母音交替系列は第IV類型 (P.P. brocen, hlocen) である。

因みに、brecanの同源対応語であるゴート語brikanは第IV類 (Wright: 1910/1968²; Holthausen: 1934; Mossé: 1942/1956) で、古高ドイツ語brekanも第IV類 (Braune & Ebbinghaus: 1891/1989¹⁴; Sonderegger: 1974) に入れている [Iwamoto 1999: pp.10-14 に記述]。

その活用形はSeebold (1970: p. 132) によれば、

- ae. brecan, bræc, bræcon, brocen
- afr. breka, brek, brēon, bretsēn
- as. brekan, brak, brōkun, -brokan
- ahd. brehhan, brah, brāhun, gibrohhan
- an. (文証形なし)
- gt. brikan, brak, ---, brukans (過去2形に文証形なし)

であり、過去分詞形母音はゴート語が/u/, 古フリースラ語が/e/, 古英語・古ザクセン語・古高ドイツ語は/o/である。即ちこの語は、本来語形的には第Ⅴ類 [CeC-] であって、母音交替が過去分詞で/o/類推を起こして第Ⅳ類型になったものである。その類推の原因は流音/r, l/の存在にあるようである。

この語brecanの類所属について、Wright (1908/1961: p.270) は第Ⅴ類にいて “p. p. brocen after the analogy of class IV” としているが；Campbell (1959: p.312) は第Ⅳ類にいて “not formally of the class” とし、諸氏 (Moore, S. and T. /Knott: 1942, H. Sweet: 1953, K. Brunner: 1962, K. Brunner: 1965, H.C. Wyld: 1963, R.M. Hogg: 1992, R. Lass: 1994) も第Ⅳ類にしている。hlecanについてはCampbell (1959: p.312) とR.M. Hogg (1992: p.154) が第Ⅳ類にいている。即ち、母音系列を優先して類別を決めている。

これをK. Brunner (1960. I/1962. II²: *Die englische Sprache: ihre Geschichtliche Entwicklung*. p.198) は第Ⅳ類の定義を、「Verba mit wurzelschliessendem /l, r, m/ und mit /r/ vor dem Wurzelsvokal (語根末にl, r, mをもつ動詞と語根母音の前に rをもつ動詞 [tr. j. 1973: p.567])」という幅をもたせた定義をすることによって、brecanを第Ⅳ類にいている (hlecanは取り上げず)。その後に刊行された*Altenglische Grammatik. nach der angelsächsischen Grammatik von Eduard Sievers neubearbeitet*. (1965: pp.300-301) で彼Brunnerは、同じく第Ⅳ類にいているが、語形に関しては言及していない。

この第Ⅳ類と第Ⅴ類の差異および第Ⅵ混合類に関しては類別に関する一つの問題点である。

(次の、第Ⅵ類と第Ⅶ類は過去1形と過去2形の母音が同音である。そのため、母音交替系列を3音で表記することがある。)

・第Ⅵ類基本型：/CVR- or -CVC-/ faran (“to go”) /a, ō, ō, a /

第Ⅵ類は母音交替により規定される類である。即ち、第Ⅳ類と第Ⅴ類の動詞が同一の母音交替をすることにより一つの類をなすものである：faran/ fōr/ fōron/ farenと活用する。

その基本型には19語がある：

イ) 第Ⅳ類型/CVR-/：alan, calan, faran, galan, span(n)an

ロ) 第Ⅴ類型/CVC-/：acan, bacan, dragan, gnagan, grafan, hladan, sacan, scacan, scafan, standan(-n-接中辞あり), tacan, wacnan, on-(-n-接中辞あり), wadan, wascan

韻構成：第Ⅳ類型 [-al] [-an] [-ar]

韻構成：第Ⅴ類型 [-ac] [-ad] [-af] [-ag]

3.3 畳音類 Reduplicated Class

・第Ⅶ類：この類は他の類とは、その定義の方法を異にする。「かつて畳音を有し（ゴート語ではなお）それを有する動詞（Von ehemals (und noch gotisch) reduplizierenden Verben: K. Brunner: 1960, p.200)」とされている。英語からみれば間接定義である。

ところが英語にはアングリア方言や詩歌に、畳音の痕跡がまだ、見られるものがある。Brunner (ibid.) はそれにも言及している (...sind anglisch und in poetischen Texten noch einige Präterita erhalten)。不定詞hatan/ 過去heht, lacan/ leolc, lætan/ leort, ondrædan/ ondreord, rædan/ reordである。その語構成は〔畳音＋加音＋語根〕で、語根母音はゼロ階梯である。hehtのみは過去加音（母音）が/e/で、その他の語の加音は/eo/である（h-e-ht; l-eo-lc; r-eo-rd）。

過去形母音が単数・複数同音であるため、活用は三形で表示する。

・語幹構造

この類は他の類とは成立定義が異なるために、不定詞語形（現在幹）による類型的分類が難しい。/-aw-an; -lc-, -ld-, -ll-an/などが考えられるが第Ⅶ類全体を律する型ではない。それを敢えて、上記第Ⅰ－Ⅳ類と同様の方法で表記するならば、次のように多様な形態になる。それでも例外は生じる。いえることは、重語幹類だということである〔なお、C：子音、V：母音、R：亮音である〕。

VIIa-(1)	/CVVC/	[CāC-]	hātan
VIIa-(2)	/CVVC/	[CæC-]	drædan
VIIb-(1)	/CVRC/	[CanC-]	bannan
VIIb-(2)	/CVVRC/	[CealC-]	fealdan
VIIb-(3)	/CVVR/	[Cāw-]	blāwan
VIIb-(4)	/CVVC/	[CēaC-]	bēatan
VIIb-(5)	/CVVC/	[CōC-]	blōtan

・下位分類 a), b)

古期英語の第Ⅶ類は過去形母音が/ē/か/ēo/かによって、a類とb類とに下位分類する（このa)・b) 分類の基準は言語によって異なる）。

・第Ⅶa類 [ē] 過去型：

- ・ 7a-1) /ā, ē, ā/活用：hātan/ hēt, heht/ hēton, hehton/ hāten など3語

1. hātan 2. lācan 3. scādan

韻構成： [-āc] [-ād] [-āt]

- ・ 7a-2) /æ, ē, æ/活用：lætan/ lēt, leort/ lēton, leorton/ læten など4語

4. drædan, on- 5. lætan 6. rædan 7. slæpan

韻構成： [-æd] [-æp] [-æt]

・第Ⅶb類 [ēo] 過去型：

- ・ 7b-1) /a, ēo, a/活用：bannan / bēon(n)/ bannen など4語

1. bannan 2. blandan 3. gangan 4. spannan

韻構成： [-and] [-ang] [-ann]

- ・ 7b-2) /ea, ēo, ea/活用：fealdan/ fēold/ fealden など8語

5. fealdan 6. feallan 7. healdan 8. stealdan 9. wealcen 10. wealdan
11. weallan 12. weaxan

韻構成： [-ealc] [-eald] [-eall] [-eax]

- ・ 7b-2) /ā, ēo, ā/活用：blāwan/ blēow/ blāwen など8語

13. blāwan 14. cnāwan 15. crāwan 16. māwan 17. sāwan
18. swāpan 19. þrāwan 20. wāwan

韻構成： [-āp] [-āw]

- ・ 7b-4) /ēa, ēo, ēa/活用：bēatan/ bēot/ bēaten など4語

21. bēatan 22. hnēapan, ā- 23. hēawan 24. hlēapan

韻構成： [-ēap] [-ēat] [-ēaw]

- ・ 7b-5) /ō, ēo, ō / blōtan/ blēot/ blōten など14語

25. blōtan 26. blōwan 27. flōcan 28. flōwan 29. grōwan

斯くして、古期英語各類基本型の語幹構造と母音交替系列の枠組みは、次のようにまとめることができる。

各類の基本型 Proto-Types of the Class (Iwamoto: 2005)

類	類型	[不定詞構造]	不定形 (語意)	母音交替系列
I	CVaVaC-	[CiC-]	ridan (=to ride)	/ i, ā, i, i /
II	CVaVbC-	[CēoC-]	bēodan (=to bid)	/ ēo, ēa, u, o /
III. N	CVRC-	[CiNC-]	bindan (=to bind)	/ i, a, u, u /
III. L1	CVRC-	[CeLC-]	helpan (=to help)	/ e, ea, u, o /
III. L2	CVRC-	[CeoLC-]	weorpan (“to throw”)	/ eo, ea, u, o /
IV	CVR-	[CeL-]	beran (=to bear)	/ e, æ, æ, o /
V-1	CVC-	[CeC-]	metan (=to measure)	/ e, æ, æ, e /
V-2	CVC	[CieC]	giefan (=to give)	/ie, ea, ēa, ie/
VI	CVR- or -CVC-		faran (“to go”)	/ a, ō, a /
VIIa	[ē] 過去型		hātan (“to call”)	/ā, ē, ā/ etc.
VIIb	[ēo] 過去型		bannan (“to summon”)	/a, ēo, a/ etc.

さらに、各項にあげた基本形の韻構成を、より抽象的に表記すると、次の様になる。

- 第Ⅰ類 [-iC]
- 第Ⅱ類 [-ēoC]
- 第Ⅲ類 [-iNC] ; [-e(o)LC]
- 第Ⅳ類 [-eR]
- 第Ⅴ類 [-eC]
- 第Ⅵ類 [-aR] (Ⅳ類型) ; [-aC] (Ⅴ類型)
- 第Ⅶa類 [-āC] ; [-æC]
- 第Ⅶb類 [-anC] [ealC] ; [- āC] ; [- ēaC] ; [- ōC]

4. 変異形 Variant Types

各類には基本形から派生した変異形がある。その変異形には、

- ・ 音声的変異として「Verner’s Law型・縮約型・音位転換型・/ū/現在型」
- ・ 語彙形態論的変異に「アオリスト現在型・弱現在型・畳音型」がある。

各類にある変異形は次の通りである。

- 第Ⅰ類：VL型・縮約型
- 第Ⅱ類：VL型・縮約型・/ū/現型
- 第Ⅲ類：VL型・音位転換型・アオ現型
- 第Ⅳ類：アオ現型
- 第Ⅴ類：VL型・縮約型・弱現型

第Ⅵ類：縮約型・弱現型

第Ⅶ類：畳音型・縮約型

以下に、各変異形の仕組みと代表的事例を次の順に述べる。

4.1 音声的変異 Phonetic Variation

(1) VL型, (2) 縮約型, (3) 音位転換型, (4) /ū/現在型

4.2 語彙形態論的変異 Lexico-morphological Variation

(1) アオリスト現在型, (2) 弱現在型, (3) 畳音型

個々の語形の特異な変異の実態は、「過去2形と過去分詞の/g/が現在形にも類推拡大した」とか「変異が働くはずが類推により原形語形が全語形に広がった」とか「縮約の結果、別々の語が同形になった」ということである。これらの変容の中に、強変化動詞のもつ理法をさぐり、その体系を明確に表示することに努める。

4.1 音声的変異 Phonetic Variants

4.1.1 VL型（第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅴ類）Verner's Law Type

これは語幹末子音/C₂/にヴェルネル（Karl Verner）の法則による変異をもつ活用である。その変異は「母音間子音が直前に弱勢、直後に強勢アクセントがあるとき、その子音が有声音化する」ことである。

ヴェルネルの法則はもともと、「有声音化環境にあるとき、語頭子音ないしは直前音節に強勢アクセントがない子音は、有声音化する」ということであるが、このことは即ち、上記の音声的環境を指している。ここに述べる強変化動詞の子音交替現象をJ. グリム（1822）は「文法的交替（Grammatischer Wechsel）」といったが、ヴェルネル（1875）は原ゲルマン語時代に上記の音環境にあった子音が有声（摩擦）音化したものとみた。

Die nach der ersten Lautverschiebung vorhandenen germ. Stl. Reibelaute [f, θ, χ, s] sind noch in urgerm. Zeit im Inlaut und Auslaut in sth. Umgebung zu entsprechenden sth. Reibelauten [b, d, g, z] (Unterlinie = frikativ: A. Iwam) geworden, wenn der unmittelbar vorhergehende Vokal nicht den Hauptton trug; (第一子音推移の後、ゲルマン語に存在する無声摩擦音 [f, θ, χ, s] は、その直前母音が主強勢アクセントをもたないとき、すでに原ゲルマン語時代において語中、語末位の有声音環境では、それぞれ対応する有声摩擦音 [b, d, g, z] になった。) —Karl Verner 1875発見；1877公刊。

ここにみる強変化動詞の（アクセント位置による）子音交替現象はその共時的残滓であるといえる。なお、Keller, R.E. (1978: p.87) はこの変異を次のように記号化している：

IE \acute{t} - > PGmc $\acute{þ}$ - > $\acute{þ}$ -

IE - t $\acute{}$ > PGmc - $\acute{þ}$ $\acute{}$ > - $\acute{\delta}$ -

非母音幹である強変化動詞は、幹母音がないために語幹と活用語尾とが直接接触する。

その活用において軽語尾の場合と重語尾の場合とでは、語幹と語尾の間の強勢アクセントの力学バランスが変わる。軽語尾をもつ「現在形と過去1形」は主母音が「重い音」（長母音か二重母音）を保持し、これに対して重語尾をもつ「過去2形と過去分詞形」は主母音が「軽い音」になる。この後者において、語幹末子音/C₂/がヴェルネルの法則変異〔VL変異と略記〕を起こすのである（下記：/V'/はその母音/V/に強勢アクセントがあることを示す）。

現在幹と過去1形 C₁V'C₂-(V-)> C₁VC₂ [-VL] -(V-)

過去2形と過去分詞形 C₁VC₂- V'- > C₁VC₂ [+VL] - V'-

原ゲルマン語ではその変異は、[f/b], [p/d], [s/z], [χ/3], [χ^w/3^w] の5種類があった（注：下線付きの/b/, /d/は摩擦音で、/b/に横線、/d/に横線を代理表記）。それがOEにおいては [f] と [b] が同音になり [f/b] 変異はともに /f/ と表記され、/χ/は母音間において消失し、残存したとしても /h/ と表記された。従って、古期英語のVL変異には5種類がある：

[p/d], [s/r], [h(<χ)/g], [h(<χ^w)/g, w], [h(<ηχ)/ŋ]

VL変異型の語形は第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ類にあり、次の動詞がある。しかしその実態は、「現在形と過去1形」対「過去2形と過去分詞形」という単純なものではなくて「非VL形」と「VL形」とが、類推変異を起こし、現在形が「VL形」となったり、活用4語形がすべて「VL形」化したりと様々である。それぞれには、次の語例がある。個々の語については別に詳述する。

第Ⅰ類 (韻構成：[-īþ] [-ig] [-is] ; 母音交替系列/ ī, ā, i, i /)

- ・ [p/d] 変異 : ætclīpan; līpan; mīpan; scriþan; snīpan; wriþan.
- ・ [s/r] 変異 : ārisan (risan; gerisan).
- ・ [h(<χ)/g] 変異 : stigan.

第Ⅱ類 (韻構成：[-ēog] [-ēos] [-ēoþ] ; /ēo, ēa, u, o /)

- ・ [p/d] 変異 : ābreōpan; sēoþan.
- ・ [s/r] 変異 : cēosan; drēosan; frēosan; hrēosan; lēosan, for-.
- ・ [h(<χ)/g] 変異 : dērogan; flēogan; lēogan.

第Ⅲ類 (韻構成: [-e(o)rp] ; /eo, ea, u, o /)
 ・ [p/d] 変異 : weorþan.

第Ⅴ類 (韻構成: [-e p/d] [-e s/r] ; /e, æ, æ, e /)
 ・ [p/d] 変異 : cweþan.
 ・ [s/r] 変異 : genesan; lesan; wesana.

4.1.2 縮約型 (第Ⅰ, Ⅱ, Ⅴ, Ⅵ, Ⅶ類) Contracted Type

語幹末子音/C₂/が χ /音のとき、それが/h/となり、さらには消失して両隣の母音同士が音縮約を起こしたものである。原音/ χ /は、過去2形と過去分詞形にVL変異(直後アクセントによる有声音化)を起こし、/g/となって現れている。

例えば, lēon; sēon(<sion); tēon(<tion); þēon; wrēonの5語は下記にみるようにその活用形とゲルマン同源語から推して/-ihan/に帰するところから第Ⅰ類に属する。それを定式化すると次のようになる:

C₁-Va- χ -Vb- > C₁-Va-h-Vb- > C₁-Va-Vb- > C₁-Vc-Vd-

即ち、第Ⅰ類の tion「訴える」は tēon/ tāh/ tigon/ tigenと活用して、/C₂/の位置に/g/が見え、ゲルマン同源語 [Got. teihan, ON. tja (弱), OHG. zihan, OSa. af-tihan] から原形は *tihanであったことが確認できる。このhが消失して両母音が約音し、/-io-/となったものである。第Ⅱ類の tēon「引く」は, tēon/ teah/ tugon/ togen, tigen と活用し、同源語 [OFr. tia, OSa. tiohan, OHG. ziohan(G. ziehen), Got. tiuhan] に対応する。よって、原形は *tiuhan (<*euhan) (Wright 1961, § 139, § 495) であり、それが [-iuha- > -iua- > -eo-] と縮約したものである。同様に、第Ⅴ類の原形は/*-ehan/; 第Ⅵ類の原形は/*-ahan/; 第Ⅶ類の原形は/*-ahan/である。

紛らわしい[縮]約音語形に 第Ⅰ類 sēon, sion「濾過する」と第Ⅴ類 sēon「見る」; 第Ⅰ類 tēon, tion「訴える」と第Ⅱ類 tēon「引く」がある。ゲルマン語の古い/ēo/と/io/は融合して一つの音/ēo/になった (Wright 1961, § 492) ために、随所で混同していて、これらは原典(作品資料)においても、また文法書も辞書も、その綴字が一定していない。

拙論においては、これを語源的にみて、第Ⅰ類/*-ihan/型は sēon (<sion<*sihan), tēon (<tion<*tihan), 第Ⅱ類/*-iuhan, *-euhan/型は tēon (<*tiuhan, *teuhan), 第Ⅴ類/*-ehan/型は sēon (<*seohan) であるから、その表記を

・ 第Ⅰ類は sēon (<sion), 第Ⅴ類は単に sēon

・第Ⅰ類は *tēon* (<*tion*), 第Ⅱ類は単に *tēon*

として書き分けることにする。

語例：縮約形は第Ⅰ, Ⅱ, V, VI, VII類にある。その縮約原形 (*-*i*han, *-*eu*han, *-*e*han, *-*a*han) はそれぞれの類の基本形にほぼ相当する。

第Ⅰ類：[-*ēon*<*-*i*han] cf. [CiC-] (韻構成：[-*ēon*]；母音交替系列/*eo*, *ā*, *i*, *i*/)

lēon (<*-*li*han) “to grant”;

sēon (<*sion* < *-*si*han) “to sieve”;

tēon (< *tion* < *-*ti*ohan, *-*ti*han) “to accuse”;

pēon (< *-*pi*han) “to thrive”;

wrēon (< *-*wri*han) “to cover”.

第Ⅱ類：[-*ēon* < *-*i*uhan (< *-*eu*han)] cf. [CēoC-] (韻構成：[-*ēon*]；/*ēo*, *ēa*, *u*, *o*/)

flēon (<*-*fli*uan < *-*fli*uhan) = to flee

[OFr. *fli*a, OSa. *fli*ohan, OHG. *fli*uhan, ON. *fly*ja, Got. *li*uhan]

tēon (<*-*ti*uhan) “to draw”

[OFr. *tia*, OSa. *tio*han, OHG. *zi*ohan(G. *ziehen*), Got. *ti*uhan] ;

第Ⅴ類：[-*ēon* < *-*e*han] cf. [CeC-] (韻構成：[-*ēon*]；/*ēo*, *ea*, *ā*, *e*/)

gefēon (<*-*gef*ehan) “to rejoice” [OF. *fagia*, OHG. *gi*-fehan] ;

gescēon (<*-*ges*cehan) “to happen” [OF. *skia*, OHG. *sce*han, G. *geschehen*];

plēon “to risk, to adventure”;

sēon (<*-*se*han) = to see [OF. *sia*, OS. OHG. *se*han, G. *sehen*, ON. *sja*, Got. *sai*hwan).

第Ⅵ類：[-*ēan* < *-*a*han] cf. [CaR-] (韻構成：[-*ēan*]；/*ēa*, *o*, *o*, *a*/)

flēan (<*-*fl*ahan) (= to flay) ;

lēan (<*-*l*ahan) “to blame”;

slēan <*-*sl*(*e*)ahan) (= to slay) [Got. *sl*ahan, G. *schlagen* “to strike”];

pwēan (<*-*pw*ahan) “to wash”.

第Ⅶ類：[-*ōn* < -*ō*han (< *-*a*ŋχan)] (韻構成：[-*ōn*]；/*ō*, *ē*, *ē*, *a*/)

fōn (“to seize”) <*-*fō*han; Got. *fā*han <Gmc. *-*f*aŋχanan

hōn (= to hang) <*-*hō*han; Got. *hā*han <Gmc. *-*h*aŋχanan.

[4.1.2の関連事項] 縮約語 *sēon*, *sion*; *tēon*, *tion* の類似形について

縮約により混同して紛らわしい語形になった OE. *sēon*, *sion*; *tēon*, *tion* がある。これらは共通ないし類似の語形もちながら、別々の語としてそれぞれの活用形をもち、またゲルマン諸語の段階でそれぞれ独自の語源をもつ。この項の資料は主に Holthausen (1974) を参照した。

また、Gmc. 語源資料は Seebold (1970) による。

[1] *sēon* 語形には類似語として強変化第 I 類 *sēon*, *sion* (= sieve, strain) 「濾過する」と強変化第 V 類 *sēon* (= see) 「見る」とがある。これらの語は、いずれも約音動詞であり、共に不定詞形に *sēon* をもち、語形が類似していて紛らわしい。これを区別するために前者を *sēon* (<*sion*), 後者を単に *sēon* と表記する。さらに強変化第 VII b 類にも類似の *sawan* (= sow) 「種を蒔く」がある。

[1.1] 第 I 類の *sēon* (<*sion*) (= sieve, strain) 「(液体を) 濾過する, 濾す」は、二つの異形 [-ē-, -i-] がある。その活用は OE. *sēon*(-i-)/*sāh*/ -----/ *siwen* (過去 2 形の文証形なし) である。この語は OE の後、廃語になった。

そのゲルマン語同源語は、いずれも第 I 類強変化動詞であり、OFr. *sia* /---/ ---/*sin*; OSa. (古形になくて、中期 MDu. *sien* あり); OHG. *sihan* /*sēh* /---/ *siwan*(-g-, -h-); (G. *seihen*: 弱変化になった); Gmc. **seihw-a-* である。

[1.2] 第 V 類の *sēon* (= see) 「見る」は OE. *sēon*/ *seah*/*sāwon*/ *sewen* と活用する。その古形は **sēohan* (<-eo- <**sehan*) / *seag*/ *sāgon*/ *sawen*, *gesegen* であった。ここに [g > h > ゼロ] の約音化過程がみられる。初出は Beowulf; 次が 950 年. Lindisfarne Gospels である。現代語も強変化形を維持して MnE. *see*/ *saw*/ *seen* である。

同源語は、いずれも第 V 類強変化動詞で、OFr. *sia*/ *sach*/ *sēgon*/ *sien*(*sēn*); OSa. *sehan*/ *sah*/ *sāwun*(*sāun*, -h-)/ *sewan*(-h-, *seen*); OHG. *sehan*(-hh-)/ *sah*/ *sāhun*(-g-)/ *gisewan*(-h-)(G. *sehen*/ *sah* /*gesehen*); Got. *saihwān*/ *sahw*/ *schwun*/ *saihwans*; Gmc. **schw-a-* である。

即ち、1.1 と 1.2 は、OE ではほぼ同形態であるが、ゲルマン諸語での活用に両者には明らかな相違があり、前者には /i/ の要素がある。

[1.3] 第 VII b 類 *sawan* (= sow) 「種を蒔く」は OE. *sawan*/ *seow*/ ---/ *gesawen* と活用した。現代では MnE. *sow* /-ed /-ed, -n と (過去分詞に一部 -n を残しながらも) 弱変化化している。(/---/ は当該の語形がないことを示す。)

そのゲルマン語同源語は、OFr. **sia* /---/---/ *p.p. esēn*; OSa. *sāian* /---/---/ *sēn*; OHG. *sājan*/ *sāhen* /*sāen*(G. *sāen*); ON. *sa* /*sera*/ *sainn*; Got. *saian* / *saisō* /---/---/; Gmc. **sā-*(cf. *seed*)。

これは大陸では弱変化形になり、英語では過去形が14c (a1300 Cursor Mundi) に弱変化形をもち、過去分詞は現代も強変化形 (-n形) を残している。

[2] [参考] これらに類似した現代語にsaw「鋸で切る」、sew「縫う」があるが、いずれも弱変化動詞である。

[2.1] saw「鋸で切る」はsawed / -ed, -n と活用し、OE末に名詞形があるが、動詞の初出は遅くa1225 Life of St. Julianaで弱過去形 (sahede)、弱過去分詞 (isahet) である。

その同源語はMDu. sagen; OHG. sagōn(G. sägen); ON. sagaである。因みに、名詞の語源はIOE. saga; Gmc. *sagō-; IE. *sek-「切る」に遡り、sectionのsec-が同源である。

[2.2] sew「縫う」は同じく弱変化語である。語形はOE. siwan, siowanで、初出はc725年 Corpus Glossである。その同源語はOFr. sia; OHG. siuwen; ON. syja; Got. siujan; Gmc. *siwjanで、L, Gr, Lett, OSi, Skr. の印欧語レベルに遡る。

[3] tēon語形も類似語として第Ⅰ類tēon (<tion) (“accuse”) と第Ⅱ類tēon (“draw”) とがある。

[3.1] 第Ⅰ類の tēon (<tion) (“accuse”)「咎める」は原形が*tīohan, *tīhanで、OE. tēon/ tēah/ tugon/ -tigen (-o-, -y-) と活用する。そのゲルマン語同源語も、いずれも第Ⅰ類強変化動詞でOFr. -ti(g)a (現在形のみ); OSa. -tīhan (現在形のみ); OHG. zihan/ zēh/ zigun/ gizigan; Got. -teihan/ -taih/ taihun/ -taihans; Gmc. *teih-a- であり、/i/的要素をもつ。

[3.2] 第Ⅱ類の tēon (=draw)「引く、導く」は、OE. tēon/ tēah/ tugon/ togen と活用する。そのゲルマン語同源語も、いずれも第Ⅱ類強変化動詞でOFr. tia/ tāch/ tegon/ -tein; OSa. tīohan/ tōh/ tugun(-h-)/ togan; OHG. zīohan/ zōh/ zugun/ gizogan(G.); Got. tiuhan/ tauh/ taihun/ tauhans; Gmc. *teuh-a- である。

ここ (3.1と3.2) においても、ゲルマン諸語での活用で過去分詞に/i/と/u, o/の差異があり、全体として前者には/i/的要素、後者には/u/的要素、即ち/ei/, /eu/の差がある。

[3.3] これ (3.1.と3.2.) に類似の語形に、第Ⅰ類pēon, pīon (“thrive”)「繁栄する」がある。それはOE. pēon(-io-)/ pāh/ pūgon/ pūngen と活用し、その同源語は OFr. pigia; OSa. thihan/ --- / thingun -thigan; OHG. pīhan, dihan/ dēh/ digun/ gidigan; ON. piggia; Got. þeihān/ þaih/ þaihun/ ---; Gmc. *þeih-a-または *þenh-a- である。

4.1.3 音位転換型（第Ⅲ類） Metathetical Type

これは母音と/r/音とが前後してその位置を交替する現象である。他の品詞においても見られる（例, axed /asked; brid /bird; third, thirty / three）が, 強変化動詞第Ⅲ類にこれがみられる。母音交替系列は/e, æ, u, o/である。

(4.1.3a) /-ier-/ 形: bi(e)rnan (=to burn) と iernan (=to run)。

即ち, West Saxon形にbirnan, byrnan, biernanがあり, *Vespasian Psalter*とRushworth資料にはbeornan, 北部方言にはbiorna (ON的語尾/-a/) がある一方で, /r/音先行形brinnanがある。また, 同源語はOF. 以外は/r/先行形である [OF. berna, OS. brennian, OHG. brennen, ON. brenna, Got. brannjan]。活用形は「現 birnan/過 1. barn, born (>bearn) /過 2. burnon/burnen」で, 母音交替は「i, a/o, u, u」系列である。

・同様に iernan, iornan (=run) も/r/先行形rinnan (この語形が現代英語に継承されてrunとなった) があり, その同源語は [OF. rinna, OS. OHG. Got. rinnan] で, すべてが/r/先行形である。そのOE. 活用形は「iernan, rinnan(Got. rinnan)/ arn (Got. rann), orn(> earn)/ urnon/urnen」である。

・これら2語の複雑な語形変異の発達順序は (1) /ir/が基本形で; (2) 次ぎに/r/音位転換が生じて; (3) 音分割 (breaking: /i/ > /io/, /eo/) が起こったものである (the metathesis of the /r/ took place earlier than breaking,...: Wright 1908/91, p.55, Note3.)。果たして, ここには (1) 原ゲルマン語段階; (2) ゲルマン諸語段階; (3) 古期英語段階でそれぞれが認められる。

(4.1.3b) /er-/形: berstan (=to burst); þerscan (=to thresh)。

これは, /CerCC-/と/CreCC/との交替形 (brestan; þrescan) をなし, 後者と同じ語構成をなす語に bregdan (=to brandish); frignan (“to ask”); stregdan (=to strew) がある。

・これらの韻構成は [-er)-st] [-re)-gd] [-re)-gn] [-er)-sc] である。

4.1.4 /ū/-現在型（第Ⅱ類） /ū/-Present Type

(4.1.4a) /ū/形の問題点 Problem of /ū/ Type

現在形が長音/ū/をもち, 他の活用形 [過去1/2形, 過去分詞形] は同じ部類の他の語と同じ母音交替系列をもつ (即ち, /ū, ēa, u, o/) という語がある。これは第Ⅱ類にのみ見られる現象で, それには brūcan; būgan; dūfan; hrūtan; lūcanなど14語がある。この/ū/語形の韻構成は [-ūc] [-ūd] [-ūf] [-ūg] [-ūp] [-ūt] である。

これはまさに奇異に映る。Lass (1994, p.157) も

「これは説明がむつかしく.....何故これらの小グループの動詞にのみみられるのか, これは謎である (These are difficult to explain..... Though why it should be restricted to just this

small goup of verbs, and not found anywhere else, is a mystery...)」

と述べている。

この起源に関しては二つの見解がある：

〈1〉第Ⅰ類に類推してGmc.の段階で-eo-から改新 (innovation) したものという概説的説明 (Hogg: 1992, p.153) と,

〈2〉不確か (uncertain) なれど, Gmc.第Ⅰ類との類推で, 第Ⅰ類では「現在/過去1」の母音交替が「i/ai」であり, 第Ⅱ類では「過去1」が「au」であることから, 逆並行で方程式「i/ai=?/au」から「?=ū」となったという理論的説明 (Campbell: 1959, p.303) である。Lass: ibid. もこれと同意見である。

(4.1.4b) /ū/形のゲルマン語的展開 Germanic Distribution of /ū / Form

この第Ⅱ類の/ū/形は, OEだけの問題ではなくて, Gmc.全体にわたる現象である。即ち, 個々の/ū/形動詞のゲルマン諸語の同源語はその殆どが, 次に挙げるように並行的に/ū/形をもっている。

・ /ū/ 動詞 /ū/ Verbs

brūcan (= to brook, “to use”): OF. brūka, OSa. brūcan, OHG. brūhhan (G. brauchen), ON. bua. VIIb, Got. brūkjan; そしてこの語はGmc. *brūk-a-, IE. *bhr-u-g-に遡り, さらに Lat. fruor, OSl. fruktatiuf, Skt. bhunakiをもつ。

būgan (= to bow, “to bend”): OHG. biogan (G. beugen), ON. *būga, Got. biugan。

dūfan (“to drive”): OSa. (Du. dubben, ON. dūfa (Norw. dubba) があるのみであるが, /ū/形は保たれている。

hrūtan (“to snore, to shout”): OF. hrūta, OSa. hrūtan, OHG. hrūzzan, ON. hrjota, Got. なし。

lūcan (“to lock”): OF. lūka, OSa. lūkan, OHG. lūhhan, ON. lūka, Got. lūkan, ga-;

Gr. λυγῖ’ζω。

lūtan (“to incline, to bow down”): ON. lūtaのみ。

scūfan (= to shove): OF. skūva, OHG. skioban, ON. skūfa, Got. skiuban。

slūpan (“to slip”): OHG. sliofan, Got. sliupan。

smūgan (“to creep”): OHG. (MHG. smiegen, LG. smuigen), ON. smjuga。

strūdan (“to rob, to pillage”): OF., OSa., OHG., ON., Got. に対応語なし。

sūcan (= to suck): Got. siukan.? (Lat. sūgō)。

sūgan (“to suck”): OF., OSa. sūgan, OHG. sūgan, ON. sūga。

sūpan (= to sup): OHG. sūfan (MHG. sūpen), ON. sūpa。

pūtan (“to howl”): この語には/ū/をもつゲルマン対応語がなくて, これと並行するOE.

þēotan には OHG. diozan, ON. þjota がある。

・ /ū/ の母音対応 Vowel Correspondence of /ū/

この母音のゲルマン語対応を表にすると次のようになる：

OE	OFr	OSa	OHG	ON	Got
brūcan	/ū/	/ū/	/ū/	/ua/	/ū/
būgan	-----	-----	/io/	/ū/	/iu/
dūfan	-----	(Du. /u/)	-----	/ū/	-----
hrūtan	/ū/	/ū/	/ū/	/jo/	-----
lūcan	/ū/	/ū/	/ū/	/ū/	/ū/
lūtan	-----	-----	-----	/ū/	-----
scūfan	/ū/	-----	/io/	/ū/	/iu/
slūpan	-----	-----	/io/	-----	/iu/
smūgan	-----	-----	(MHG/ie/)	/ju/	-----
strūdan	-----	-----	-----	-----	-----
sūcan	-----	-----	-----	-----	/iu/
sūgan	-----	/ū/	/ū/	/ū/	-----
sūpan	-----	-----	/ū/	/ū/	-----
þūtan	-----	-----	-----	-----	-----
cf. þēotan	-----	-----	/io/	/jo/	-----

ここで音韻対応式：

OE. /ū/ = OFr. /ū/ = OSa. /ū/ = OHG. /ū, io/ = ON. /ū, jo/ = Got. /ū, iu/

がえられる。即ち、6つのゲルマン代表言語のすべてに /ū/ をもち、OHG, ON, Got では副次的に /io, iu/ をもつ対応関係である。

・ /ū/ と /ēo/ の転換軸 Pivot between /ū/ and /ēo/

OE. /ū/ 型の þūtan はゲルマン語に対応語がない。それに対して /ēo/ 型の þēotan はゲルマン対応語をもつ（上表の末尾欄 cf. þēotan 参照）。後者は OHG. /io/, ON. /jo/ と対応し、その対応は、上記 OE. /ū/ 型諸語形の対応式に一致する。つまり、þūtan（第Ⅱ類）「吼える」と þēotan（同じく第Ⅱ類）「(狼のように) 吼える」は二重語（doublets）である。意味も然り。また、slūpan（Ⅱ）は OHG. /io/, Got /iu/ と対応し、þēotan（Ⅱ）と同じ対応関係にある。

また第Ⅱ類の sprēotan（Ⅱ）（= to sprout）「芽生える，発芽させる」の Bosworth/Toller. OE 辞典での実在文証形は sprūtan であり、まさに /ū/ 型そのものである：

- ・ that beo ha eanes fulliche forcoruen, ne sprūted ha neauer eft, H. M. 11, 20.
- ・ an gerd sal sprūten of iesse more, OEHG Oml. 11. 217. 25.
- ・ In a night sua did it sprūte, C. M. 11216.

---いずれもB/T 辞典より引用。

その活用形はsprūtan/sprēat/spruton/sprotenで第Ⅱ類母音交替系列であり，同源語にはOFr. sprūtaがある。

・ゲルマン語の/ēo/動詞 Germanic Cognate Verbs with /ēo/

このことから，第Ⅱ類/-ēo-/動詞のゲルマン語同源対応語をもとめると，次の13語の対応があり，

1. bēodan = OF. boida = OS. biodan = OHG. biotan = Got. biudan
2. brēowan = OS. (Du. brouwen) = OHG. briuwan = ON. brugga
3. cēowan = (Du. kaauwen) = OHG. kiuwan = ON. tryggja
4. clēofan = OS. klioban = OHG. kliuban = ON. klyufa
5. crēopan = OFr. kriapa = OSa. crieapan = OHG. kriuchan = ON. (Ic. krjupa)
6. drēopan = OF. driapa = OHG. triufan = ON. driupa
7. flēotan = OF. fliata = OHG. fliuzan = ON. fliota
8. hrēowan = OS. hrewan = ON. (Ic. hryhþja) = OHG. hriuwan
9. rēocan = OHG. riuhhan = ON. (Ic. rjuka)
10. rēodan = ON. (Ic. rjoda)
11. scēotan = OF. skiata = OHG. sciozan = ON. skjota
12. smēocan <対応語なし>
13. sprēotan (=to sprout) = OF. spruta

・その母音対応を表にすると次のようになる：

〈母音対応表〉

	OE.	OFr.	OSa.	OHG.	ON.	Got.

1.	ēo	io	io	io	---	iu
2.	ēo	---	(ou)	iu	u	---
3.	ēo	---	(aau)	iu	y	---
4.	ēo	---	io	iu	yu	---
5.	ēo	ia	ie	iu	ju	---
6.	ēo	ia	---	iu	iu	---
7.	ēo	ia	---	iu	io	---
8.	ēo	---	eu	iu	y	---
9.	ēo	-----	iu	ju	---	
10.	ēo	---	---	---	jo	---
11.	ēo	ia	---	io	jo	---
12.	ēo	---	---	---	---	---
13.	ēo	u	---	---	---	---

これから、対応式

OE. /ēo/ = OFr. /io, ia, ū/ = OSa. /io, ie, eu/ = OHG. /io, iu/ = ON. /u, yu, yo/ = Got. /iu/

が得られる (ON. の /j/ と /y/ とは同一音素とみる)。これと上掲の /ū/ 系列対応式

OE. /ū/ = OFr. /ū/ = OSa. /ū/ = OHG. /ū, io/ = ON. /ū, jo/ = Got. /ū, iu/

とを対比すると、

- ・ OE. /ū/ は、ゲルマン諸語に /ū/ の対応音を有し、その中には /io, iu/ もあること、
- ・ OE. /ēo/ もまたゲルマン諸語に /io, iu/ の対応音を有し、その中には /ū/ もあること、
- ・ 第Ⅱ類現在形の /ū/ は OE. のみではなくて、ゲルマン語規模の範囲に（特に西ゲルマン語に）みられる現象であること、

がわかる。即ち、この /ū/ と /ēo/ はゲルマン語的に同根であり、何らかの語形を転換軸点 (pivot) として異形に (/ēo/ から /ū/ に) 転じたものであろう。なお、古期英語の北部方言 (Lindisfarne Gospels, *Rituale Ecclesiae Dunelmensis* (OE gloss)) では、過去1形の /ēa/ が過去2形 (本来は /ē/) にも拡大使用される (Campbell, p.309) など、この類の活用形は第Ⅰ類に比べて多少の混同がある語群である。

この語形の揺れの中で上記の Campbell のいう並行方程式「 $i/ai = ?/au$ 」から「 $? = \bar{u}$ 」となったというのも説得的な説明である。ここには類推作用が働いている。

(4.1.4c) 第Ⅱ類 /ū/ 型動詞の英語史上の語形変遷

Historical Development of /ū/ Verbs in Class II

ここで、この /ū/ 動詞が英語史上、どのように変遷して今日の語形に到っているかをみる。

/ū/ 動詞のうち、現代英語にまでその語形を残す語は *brūcan*, *būgan*, *scūfan*, *sūcan*, *sūpan* である。母音 /ū/ は、その大半が 14–16 世紀に起こった母音大推移 (GVS) により /au/ となった (OE. *ūt* > MnE. *out* [aut]) が、ここでは *būgan* にのみ、それがみられる。

- ・ *brūcan* > *brook* [\bar{u} > u]

この語の語形変遷は /ū/, /ō/, /ü/ の3筋があり、文証語形をみると、/ū/ は 11c. *brucan* > 13-6c. *brouke*, 14-5c. *browke* があり、/ū// はフランス風綴字になり -ou- と綴られている。/ō/ は 13-5c. *broken*, 15--c. *brook* (e があり、母音は /ō>u/ と変わる。/ü/ は Scotland 方言に 15-6c. *bruke*, 16c. *brwk*, 16-8c. *bruik*, 17c. *bruike* がある。この語が [\bar{u} >au] とならずに [u] となったのは北部方言ないし北欧語 (ノルド語) の影響と考えられる。

・ būgan > bow [ū > au]

その綴字は 11c. bugan, 12-3c. bugen, 13c. bougen, buwen, buen, bouwe, buch, 14c. boowen, boge, boghe, bue, boue, bouh, buu, 14-5c. bogh, 14-7c. bowe, 16c. bough, 16-8c. boow, 14--c. bow と変遷した。綴字から 11c. bugan の母音は [ū] であり, 14--c. bow は GVS を経れば [au] となることは明かである。/g/ は摩擦音化して /h/ となりさらには消失した。

・ scūfan > shove [ū > ou]

この語の母音は 11c. /u/, 13c. /u/, 13-4c. /u/, 14-5c. /o/ と綴字変遷をしていて, 音声が [ū > ou] と変わることをあらわしている。

・ sūcan > suck [ū > ʌ]

この語の母音は 11c. /u/, 13-6c. /ou, ow/, 14-7c. soke (n /o/, 15-7c. sucke/u/ がある。最後の ^gMnE [ʌ] 音となったものである。

・ sūpan > sup [ū > ʌ]

これには長音/ū/と短音/u/の2筋の変遷がある。

(1) 長音/ū/は 11c. supan, 14-6c. sowpe(n, 14-7c. soupe(n, soope(n で [ū] を維持し,

(2) 短音/u/は北部方言で 11c. suppa, 14-7c. suppe, 15--c. sup で [u > ʌ] となった。

この語の現代英語形 sup [ʌ] の短音化は, 北部方言ないし北欧語 (古ノルド語) の影響と考えられる。

4.2 語彙形態論的変異 Lexico-Morphological Variants

4.2.1 アオリスト現在型 (第Ⅲ, Ⅳ類) Aorist-Present Type

母音/i, u/を現在形にもつ動詞がある。強変化動詞には *murnan*, *spurnan*, *cuman*, *niman* がある。その主母音は /u, i/ でゼロ階梯であり, 本来, 印欧語的にはアオリスト語形の音である。そのアオリスト語根を現在形として使用し, そこから新たに過去形をつくり, 一つの語として活用体系をもつようになったものである。これを「アオリスト現在動詞」(aorist-present verb) という。(ゲルマン語においてはそれは過去形に相当するために過去現在形 *Preterito-Present verb* ともいう)。

Murnan, *spurnan* は強Ⅲ類の過去2形母音 /ur/ を語根にして, 現在形が生じたものである。*Cuman* と *niman* の語幹構成は /i, u+N/ であるが, 過去1/2形が長母音 /ō/ で特徴的である (実は過去2形の拡大使用)。

本来 *cuman* はゼロ階梯であり, **kwoman* のアオリスト語形 **kwum-* である。そして類音連続 /wu/ の /w/ が自然消失したものである。過去形は **cwam*, **cwom* となるべきが, 長母音の新過去語形 *c(w)ōm* /*c(w)ōmon* ができた。Anglia 方言では過去形 (1形にも2形にも) に /w/ をもつ (Campbell. p.313)

Niman の Gmc. 同源語に注意。元は **neman* である (cf. G. *nehmen*)。この語の現在母音は

ゴート語以外は本来形の/e/をもつ [OF. nema, nima; OS. neman, niman; OHG. neman; ON. nema; Got. niman]。過去1形のnmの長母音は過去2形母音からの類推拡大使用である（上述）。

〔参考〕第Ⅰ類 ripanに異形ripan, riopanがある。Holthausen『OE語源辞典』は短母音のripanと二重母音のriopanをあげている。J. Wrightらは常に長母音のripan（第Ⅰ類にふさわしい）をあげている。この語には他の古期ゲルマン諸語にその対応例がなく、あるのは中期低地ドイツ語（MLG.）repen, 現代ノルウェー語（MnNorw.）ripa, 現代英語（MnE.）reap「刈る」のみで、原形が長母音か短母音か不明である。とにかく、これが短音/i/ならば、この過去現在形に相当する。しかし、本稿では、この語を第Ⅰ類ripanとして、ここには入れない。

第Ⅲ類	murnan/ mearn/ murnon/ mornen	韻構成：[-urn]；/u, ea, u, o/
	spurnan/ spearn/ spurnon/ spornen	韻構成：[-urn]；/u, ea, u, o/
第Ⅳ類	cuman/ c(w)ōm / c(w)ōmon/ cumen	韻構成：[-um]；/u, ō, ō, u/
第Ⅳ類	niman/ nōm, nam / nōmon, namon/ numen	韻構成：[-im]；/i, ō, ō, u/

4.2.2 弱現在型（第Ⅴ，Ⅵ類）Weak-Present Type

弱変化動詞は語根と語尾の間に接辞/i/をもつ（語根+i+語尾：即ち [Rt+/i/+D]）。弱Ⅰ類がその典型である。その/-i-/を含めた語幹が現在形となり活用は強変化活用をするのが弱現在動詞（weak-present verb）または「j-現在形」（j-present）である。古期英語では強変化活用をして、かつ、ゲルマン対応語が弱変化形語尾/-jan/をもつ動詞群である。これは西ゲルマン語の特徴として/i/音の前では/r/以外は重子音になる傾向が強かった（W. Gmc. consonant doubling is particularly strongly developed before /i/, every consonant except /r/ being affected after short syllables. Campbell: 1959, § 407）ために、語構成がCVCC-/語幹，即ち、/短母音+重子音/の語形となったものである。

第Ⅴ類では重子音/-dd-, -tt-/ とそれが進化した破擦音/-cg-/ [tʃ, dʒ] をもち、第Ⅵ類では重子音/-bb-, -hh-, -þþ-, -pp-/ の他に、例外的に/r/音がswerian の形で/-i-/を残している。

第Ⅴ類	biddan; fricgan; licgan; sittan; picgan
	韻構成：[-iCC]；母音交替系列/i, æ, æ, e /
第Ⅵ類	hebban; hlehhan; sceþþan; scippan; steppan; swerian
	韻構成：[-eCC]；母音交替系列/e, ō, a /

4.2.3 畳音型 Reduplicated Type

(4.2.3a) 畳音動詞

過去形において、語幹の語頭音を前接辞に置いて加音を付して/畳音+加音+語幹+/という構成をもつ活用がある。これが第Ⅶ類畳音活用形である。畳音は語幹頭音と同音の子音を語頭位

[-if]	clifan, drifan, be-lifan, scrifan, to-slifan, swifan
[-ig]	hnigan, migan, sigan, wigan
[-in]	cīnan, ā-cwīnan, dwīnan, gīnan, hrīnan, hwīnan, scīnan, þwīnan
[-ip]	gripan, nīpan, rīpan
[-it]	bitan, flitan, hnitan, be-scitan, slitan, smitan, þwitan, æt-witan, wlitan, wītan
[-iw]	spiwan

1-2) VL型

[-ip]	æt-clīpan, liþan, miþan, scriþan, sniþan, wriþan
[-ig]	stigan
[-is]	(ā-)risan

1-3) 縮約型

[-ēon]	lēon, sēon(<sion), tēon(<tion), þēon, wrēon
--------	---

第Ⅱ類

2-1) 基本型

[-ēoc]	rēocan, smēocan
[-ēod]	bēodan, cnēodan, lēodan, rēodan
[-ēof]	clēofan
[-ēop]	crēopan, drēopan, gēopan
[-ēor]	lēoran
[-ēot]	brēotan, flēotan, gēotan, hlēotan, nēotan, rēotan scēotan, sprēotan, þēotan ā-þrēotan
[-ēow]	brēowan, cēowan, hrēowan, snēowan

2-2) VL型

[-ēog]	drēogan, flēogan, lēogan
[-ēos]	cēosan, drēosan, frēosan, hrēosan, for-lēosan
[-ēop]	ā-brēoþan, sēoþan

2-3) /ū/型の韻構成

[-ūc]	brūcan, lūcan, sūcan
[-ūd]	strūdan
[-ūf]	dūfan, scūfan
[-ūg]	būgan, smūgan, sūgan
[-ūp]	slūpan, sūpan
[-ūt]	hrūtan, lūtan, þūtan

2-4) 縮約型

[-ēon] flēon, tēon

第Ⅲ類

3-1) N-基本型

[-imb] climban

[-imm] crimman, grimman, hlimman, ge-limpan, swimman

[-inc] crincan, ā-cwincan, drincan, scrincan, sincan, slincan, stincan, swincan

[-ind] bindan, findan, grindan, hrindan, swindan, þindan, windan

[-ing] clingan, cringan, singan, slingan, springan, stingan, swingan, þringan, wringan

[-inn] brinnan(bi(e)rnan), on-ginnan, linnan, rinnan(iernan), sinnan, spinnan, winnan

[-int] þrintan

3-2) L-基本型1

[-eld] gieldan, be-teldan

[-elf] delfan

[-elg] belgan, swelgan

[-ell] bellan, giellan, swellan

[-elp] gielpān, helpān

[-elt] meltan, sweltan

3-3) L-基本型2

[-eolc] meolcan, ā-seolcan

[-eolh] fēolan(< *felhan)

[-eorc] beorcan, sweorcan

[-eorf] ceorfan, deorfan, hwerfan, sceorfan1, steorfan, sweorfan

[-eorg] beorgan

[-eorp] sceorpan, weorpan

[-eort] smeortan

[-eoht] feohtan

3-4) VL型

[-rþ] weorþan

3-5) /r/-音位交替型

[-(er)-st] berstan

[-(re)-gd] bregdan, stregdan

[-(re)-gn] fregnan(frignan)

[-(er)-sc] þerscan

3-6) アオリスト現在型

[-urn] murnan, spurnan

第Ⅳ類

4-1) 基本型

[-el] cwelan, helan, hwelan, stelan

[-er] beran, sc(i)eran, sc(i)eran, teran, þweran

[-(l/r)ec] breacan*, hlecan*

4-2) アオリスト現在型

[-i/u-m] cuman, niman

第Ⅴ類

5-1) 基本型1

[-ec] sprecaþ, wrecaþ

[-ed] cnedan, tredan,

[-ef] swefan, wefan,

[-eg] plegan, wegan

[-ep] drepan, screpan

[-et] etan, fretan, metan

5-2) VL変異型

[-e þ/d] cweþan

[-e s/r] lesan, ge-nesan, wesan

5-3) 基本型2

[-ief] giefan

[-iet] gietan

5-4) 縮約型

[-ēon] ge-fēon, plēon, ge-scēon, sēon

5-5) 弱現在型

[-icg] fricgan, licgan, þicgan

[-idd] biddan

[-itt] sittan

第Ⅵ類

6-1) 基本型

・ [第Ⅳ類型]

[-al] alan, calan, galan

[-an] span(n)an

[-ar] faran

・ [第Ⅴ類型]

[-ac] acan, bacan, sacan, scacan, tacan

[-ad] hlanan, wadan

[-af] grafan, scafan

[-ag] dragan, gnagan

・ [-n-接中辞]

[-a(n)d] standan

[-ac(n)] wacnan, on-

・ [-sc/sh/x 交替]

[-asc] wascan

6-2) 縮約型

[-ēan] flēan, lēan, slēan, þwēan

6-3) 弱変化現在型

[-ebb] hebban

[-ehh] hlehhan

[-epp] sci(e)ppan, steppan

[-eþþ] sceþþan

[-er] swerian

第Ⅶa類 [/ē/過去型]

7a-1) [-ā-] 現在型

[-āc/d/t] hātan, lācan, scādan

7a-2) [-ǣ-] 現在型

[-ǣd/p/t] on-drǣdan, lǣtan, rǣdan, slǣpan

7a-3) 縮約型

[-ōn] fōn, hōn

第Ⅶb類 [/ēo/過去型]

7b-1) an現在型

[-and]	blandan
[-ang]	gangan
[-ann]	bannan, spannan

7b-2) eal現在型

[-ealc]	wealc
[-eald]	fealdan, healdan, stealdan, wealdan
[-eall]	feallan, 1 weallan

7b-3) eax現在型

[-eax] weaxan

7b-4) ā現在型

[-āp] swāpan
[-āw] blāwan, cnāwan, crāwan, crāwan, sāwan, prāwan, wāwan

7b-5) ēa現在型

[-ēap]	hlēapan, ā-hnēapan
[-ēat]	bēatan
[-ēaw]	hēawan

7b-6) \bar{o} 現在型

[-ōc]	flōcan
[-ōg]	swōgan
[-ōp]	hrōpan, hwōpan, wēpan
[-ōs]	hwōsan
[-ōt]	blōtan, wrōtan
[-ōw]	blōwan, flōwan, grōwan, hlōwan, rōwan, spōwan

[illegible]

上記各項の韻構成の構造（韻構造）を，さらに抽象的に表記すると，次のようになる（〔 〕は基本型，〔 〕は変異型）。

第Ⅰ類	[-iC]
第Ⅱ類	[-ēoC] [-ūC]
第Ⅲ類	[-iNC] [-eLC] [- <u>(r)CC</u>] [-uRN]
第Ⅳ類	[-eR] [-uN]
第Ⅴ類	[-eC] [-iCC]
第Ⅵ類	[-aR] [-aC] [- <u>eCC</u>]
第Ⅶa類	[-āC] [-ǣC]
第Ⅶb類	[-anC] [-ealC] [-āC] [-ēaC] [-ōC]

6. 類別語構成と母音交替系列：基本型と変異型の一覧表 Proto-Types and Variant Types in Classification

以上の結果から、各類の語構成（韻構造を含む）と母音系列を基本型と変異型にわけて示すと、次表のように整然とした体系になる。

（表において、「アオ現」はアオリスト形現在型、「弱現」は弱変化形現在型の意。また、R（亮音Sonant）には流音Liquid [l/r]と鼻音Nasal [m/n]がある。V_[zero]（ゼロ階梯母音）は印欧語の音韻体系からみたものでi, u/のことである。）

重語幹類 Heavy Base Classes

・第Ⅰ類：/CVaVaC-/

- 1) 基本型 [CiC-] rīdan (=to ride) / i, ā, i, i /
- 2) VL型 [CiC-] snīpan (“to cut”) / i, ā, i, i /
- 3) 縮約型 [-ēon] wrēon (“to cover”) / ēo, ā, i, i / (-ēon <-ih-an)

・第Ⅱ類：/CVaVbC-/

- 1) 基本型 [CēoC-] bēodan (=to bid) / ēo, ēa, u, o /
- 2) VL型 [CēoC-] cēosan (=to choose) / ēo, ēa, u, o /
- 3) 縮約型 [-ēon] flēon (=to flee) / ēo, ēa, u, o / (-ēon <-iuhan, -euh-an)
- 4) /ū/型 [CūC-] brūcan (=to brook) / ū, ēa, u, o /

・第Ⅲ類：/CVRC-/

- 1) N-基本型 [CiNC-] bindan (=to bind) / i, a/o, u, u /
- 2) L-基本型1 [CeLC-] helpān (=to help) / e, (e)a, u, o /
- 3) L-基本型2 [CeoLC-] weorpan (“to throw”) / eo, ea, u, o /
- 4) VL型 [CeoLC-] weorþan (“to become”) / eo, ea, u, o /

- 5) 音位交替 [C-r/e-CC-] bregdan (= to brandish) / e, æ, u, o /
 6) アオ現型 [CV_[zero]LC-] murnan (= to mourn) / u, ea, u, o /

軽語幹類 Light Base Classes

・第Ⅳ類：/CVR-/

- 1) 基本型 [CVL-] beran (= to bear) / e, æ, æ, o /
 2) アオ現型 [CV_[zero]N-] cumān (= to come) / u, ō, ō, u /
 3) アオ現型 [CV_[zero]N-] niman (“to take”) / i, ō/a, ō/ā, u /

・第Ⅴ類：/CVC-/

- 1) 基本型1 [CeC-] metan (= to measure) / e, æ, æ, e /
 2) VL型 [CeC-] cweþan (“to say”) / e, æ, æ, e /
 3) 基本型2 [CieC-] giefan (= to give) /ie, ea, ēa, ie / (ie <e)
 4) 縮約型 [-on] sēon (= to see) /ēo, ea, ā, e / (-ēon <-eh-an)
 5) 弱現型 [C i CC-] biddan (“to ask”) /i, æ, æ, e /

混合類 Mixed Class

・第Ⅵ類：/CVR- or -CVC-/ (「過去 ō；過去分詞 a」の動詞群)

- 1) 基本型 [CaR-] faran (“to go”) / a, ō, a /
 2) 縮約型 [-ēan] flēan (= to flay) /ēa, ō, a / (-ēan <-ah-an)
 3) 弱現型 [CVCC-] hebban (= to heave) /e, ō, a /

畳音類 Reduplicated Class

・第Ⅶa類 [ē] 過去型

- a1) [ā] 型 hātan (“to call”) / ā, ē, ā /
 a2) [æ] 型 on-drædan (= to dread) / æ, ē, æ /
 a3) 縮約型 [-ōn] fōn (“to seize”) / ō, ē, a / (-ōn <-ōh-an)

・第Ⅶb類 [ēo] 過去型

- b1) [a] 型 bannan (“to summon”) /a, ēo, a /
 b2) [ea] 型 fealdan (= to fold) /ea, ēo, ea /
 b3) [ā] 型 blāwan (= to blow) /ā, ēo, ā /
 b4) [ēa] 型 bēatan (= to beat) /ēa, ēo, ēa /
 b5) [ō] 型 blōtan (“to sacrifice”) / ō, ēo, ō /

7. 結語

以上、古期英語強変化動詞の分類に関して、各類の語構成を基本型と変異型に分けて検証した。

まず、基本的に、類の構成は本来枠としての語幹構造による類別とそれに属性的に付随する母音交替系列によって成り立つ。これが基本型である。しかし現実には、音的条件や語彙構造上の条件により変異が生じる。音融合（音縮約型）や異化（第Ⅶ類畳音過去形）、音推移（第Ⅲ類N音型）、類推変異（随所）がおこり、語彙のレベルにおいては語形の並行的構成による類推、移行、同化、縮約、消失などがある。第Ⅶ類の多様性ととともに、ここには各個の特徴的構成がみられる。

具体的には、V類型語形でありながら母音交替はⅥ類に移った**brecan, hlecan**や、Ⅳ類型とV類型の混在する第Ⅵ類動詞群のように、既定の枠から他の類に移るものがある。それぞれに要因が作用して、変動を起こしているのが実態である。

この実態に対して、類の定義は「語幹構造」が主体（第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ類）であったり、「母音交替系列」が主体（第Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ）であったり、過去形形成方式（第Ⅶ類）であったり、という一見して不確かな体系を構成している。

これを分類するのに、拙稿は「基本型と変異型とに分ける方式」により、強変化動詞および各類の本質を明確にし、その分類を整然とした体系にして見ることができた。その成果としてこの段階で、ここに各類の型とその語構造定式（[CiNC-] など）、代表的語例と母音交替系列（/ī, ā, i, i / など）を一覧表（pp.125-126）にして示す。

韻構造は、語形的にこの強変化動詞の動的な活用の柱になり、通時的変遷や語形維持、類推的語形生成の基盤になる。その語形的枠組みがこの韻構造である。話者の語形枠はこのレベルにあると考えられる。母音交替はこの枠にそって付随的にそれぞれの交替系列を形成しているのである。古期英語強変化動詞は、まさにこの韻構造を軸として、その動的な体系を保持している。

参考文献 Bibliography

1. 文献 Books and articles

- Baugh, A.C. & T. Cable. 1978. *A History of the English Language*. New Jersey: Prentic-Hall.
 Braune, W. & E.A. Ebbinghaus. 1989¹⁴. *Abriss der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer.
 Braune, W. & E.A. Ebbinghaus. 1981. *Gotische Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer.
 Braune, W. & W. Mitzka. 1963. *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer.
 Brugmann, K. 1902-04. *Kurze vergleichende Grammatik der indo-germanischen Sprachen*. Strassburg: Trübner.

- Brunner, K. 1960 u. 1962. *Die englische Sprache: Ihre geschichtliche Entwicklung*. Tübingen: Max Niemeyer. 2Bde. [1973: Japanese translation].
- Brunner, K. 1965. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Coetsem, F. van. 1956. "Das System der starken Verben und die Periodisierung im älteren Germanischen". In *MKNA* [Mededelingen van de Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, afdeling Letterkunde (=Transactions of the Royal Netherlands Academy of Sciences)] Vol.19, No.1. Amsterdam: N.V. Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij. pp.8-14.
- Crépin, A. 1978. *Problèmes de grammaire historique*. Paris: PUF.
- Curme, G.O. 1904. *A Grammar of the German Language*. New York: Ungar.
- Curme, G.O. 1935. *Parts of Speech and Accidence*. (1965 Maruzen reprint.).
- Durrell, M. 2001. "Strong Verb Ablaut in the West Germanic languages". In *Zur Verbmorphologie germanischer Sprachen*. Tübingen, 5-18.
- Fries, C.C. 1940. *American English Grammar*. New York: Appleton.
- Galle, J.H. 1910. *Altsächsische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Grimm, J. 1819-37 (2nd ed. 1822 /reprint. 1970). *Deutsche Grammatik*. Göttingen.
- Grimm, J. 1848. *Geschichte der deutschen Sprachen*. Leipzig.
- Haudry, J. 1984. *L'indo-européen*. Paris: PUF. (邦訳: 岩本 2001, 白水社)
- Hirt, H. 1934. *Handbuch des Urgermanischen*. Heidelberg.
- Hogg, R.M. 1988. "Snuck: The Development of irregular preterite forms" In Nixon, G. & J. Honey, eds. *An Historic Tongue. Studies in English Linguistics in Memory of Barbara Strang*. London, New York: Routledge, 31-40.
- Holthausen, F. 1921. *Altsächsisches Elementarbuch*. Heidelberg: C. Winter.
- Iwamoto, A. 1987. "Umlaut in English". In *Bulletin of the Institute of Linguistic Sciences*, vol.8. Kyoto Sangyo University.
- Iwamoto, A. 1989. "IE. Characters of English Verb". In *Bulletin of the Institute of Linguistic Sciences*, vol. 10. Kyoto Sangyo University.
- Iwamoto, A. 1993. "Preterite-Present Verbs Reconsidered". In *Bulletin of the Institute of Linguistic Sciences*, vol.14. Kyoto Sangyo University.
- Iwamoto, A. 1999/2003²/2005³. *Study of English Strong Verbs*. Ise: Gakuto-sha.
- Karlstein, C. 1921. *Die reduplizierten Perfekta des Nord- und West- germanischen*. Gießen, V. Münchow'sche Universitätsdruckerei.
- Keller, R.E. 1978. *The German Language*. London: Faber & Faber.
- Kienle, Richard von. 1969. *Historische Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Klaeber, Fr. 1950. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Massachusetts: Heath.
- Krahe, H. 1966/69. *Indogermanische Sprachwissenschaft*. Berlin: S. Göschen [第Ⅲ部 邦訳: 岩本 2002, 岳灯社].
- Krahe, H. 1967. *Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen*. Heidelberg.
- Kraus, W. 1968. *Handbuch des Gotischen*. München.
- Lass, R. 1994. *Old English*. Cambridge.
- Lass, R. and J.M. Anderson. 1975. *Old English Phonology* (Cambridge Studies in Linguistics 14). Cambridge: Cambridge U.P.
- Lehmann, W.P. 1971. "Grammatischer Wechsel and current phonological discussion". In *Generative studies in historical linguistics*. Edmonton. pp.9-43.
- Lehnert, M. 1978. *Altenglisches Elementarbuch*. Berlin: S. Göschen.
- Lockwood, W. B. 1976. *An Informal History of the German Language*. London: Andre Deutsch.
- Markey, T.L. 1981. "Frisian". In *Trends in Linguistics*. The Hague: Mouton.

- Meillet, A. 1930. *Caractères généraux des langues germaniques*. Paris: Achette.
- Meillet, A. 1937. *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. Paris [reprt. 1964. Alabama].
- Moore, S. and T. Knott. 1942. *The Elements of Old English*. Michigan: G. Wahr.
- Mossé, F. 1956. *Manuel de la langue Gotique*. Paris: Aubier Montaigne.
- Mossé, F. 1959. *Manuel de l'anglais du Moyen Age*. Paris: Aubier Montaigne.
- Myers, L.M. and R.L. Hoffman. 1979. *The Roots of Modern English*. Little, Brown.
- Noreen, A. 1970. *Altnordische Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Paul, H. 1968. *Deutsche Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Penzl, Herbert. 1972. "Old Germanic Languages". In *Current Trends in Linguistics*. pp.1232-1281.
- Polenz, Peter von. 1978. *Geschichte der deutschen Sprache*. Berlin: S. Gschen.
- Prokosch, E. 1939. *A Comparative Germanic Grammar*. Baltimore: Yale.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Ranke, F. and D. Hofmann. 1988. *Altnordisches Elementarbuch*. Berlin: S. Göschen.
- Rauch, I. 1992. *The Old Saxon Language*. New York: Peter Lang.
- Schatz, J. 1927. *Althochdeutsche Grammatik*. Göttingen.
- Schildt, J. 1991. *Kurze Geschichte der deutschen Sprache*. Berlin (邦訳：大修館, 1999).
- Shields, K.C. 1992. *A History of IE Morphology*. Amsterdam: John Bernjamins.
- Sonderegger, S. 1974. *Althochdeutsche Sprache und Literatur*. Berlin: W. de Gruyter.
- Streitberg, W. 1896/repr. 1976. *Urgermanische Grammatik*. Heidelberg.
- Streitberg, W. 1920. *Gotisches Elementarbuch*. Heidelberg.
- Stutterheim, C.F.P. 1960. "Structuralism and reconstruction. Some notes on the verbal system of Primitive Germanic". In *Lingua* 9, 237-57.
- Sweet, H. 1953. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. Oxford.
- Szemerényi, O. 1970. *Einführung in die Vergleichende Sprachwissenschaft*. Darmstadt.
- Szemerényi, O. 1996. *Introduction to Indo-European Linguistics*. Oxford.
- Verner, Karl. 1877. "Eine Ausnahme der ersten Lautverschiebung". In *Zeitschrift für vergleichende Sprachwissenschaft* 23, 97-130.
- Watts, S., J. West & H.-J. Solms. 2001. *Zur Verbmorphologie germanischer Sprachen*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Wright, Joseph. 1908/1961³. *Old English Grammar*. Oxford.
- Wright, Joseph. 1910/1968². *Grammar of the Gothic Language*. Oxford.
- Wright, Joseph 1962. *An Elementary Middle English Grammar*. Oxford.
- Wright, J. & Elizabeth M. 1961. *Old English Grammar*. Oxford.

2. 辞書 Dictionaries

- Bosworth, J. & T. N. Toller. 1964. *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford.
- Holthausen, F. 1822/1974. *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: C. Winter.
- Holthausen, F. 1934 *Gotisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: C. Winter.
- The Oxford English Dictionary* (OED). 1989². Oxford.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague/Paris: Mouton.
- Shorter Oxford English Dictionary* (SOD). 1973. Oxford.
- Skeat, W. 1911. *Etymological Dictionary of the English Language*. Oxford.
- Stratmann, F. H. and H. Bradley. 1963. *A Middle-English Dictionary*. Oxford.
- Zoega, Geir T. 1910. *A Concise Dictionary of Old Icelandic*. Oxford.

Classification and Rhyme Structures of OE Strong Verbs

— Proto-Types and the Variants —

Atsushi IWAMOTO

Abstract

Definition of the Strong Verb in Gmc Level

After the metaphoric definition of the strong verb by J. Grimm (1819-37; 1822²), a precise classification of the verbs was made by F. van Coetsem (1956), and then C.F.P. Stutterheim (1960) and C. Karlstein (1921). But their works were of Germanic level mainly based on the data of Gothic and Old Norse. And the studies of this field were made within the frame of these works.

English strong verbs have been dealt within this Germanic frame. As is the case of other Germanic languages, English also has proto-type forms and variant forms of strong verbs due to the phonetic and lexical environmental conditions of its own. Therefore in place of the given classification from Germanic level, we should make a classification of English strong verbs with the data of English.

Classification of the Strong Verb

Strong verbs are divided into seven classes according to the ablaut series. The speakers will take the ablaut series on the basis of word structure. Preterit and past participle forms are made with the basis of the root form of Infinitive-Present. Therefore the classification of strong verbs is connected with both ablaut series and the word structure.

Proto Type of Word-Base Structure

The infinitive of each class has its Proto-Type forms of word-base structure as follows:

- I [CVaVaC-] (-VaVa- : long vowel)
- II [CVaVbC-] (-VaVb- : diphthong)
- III [CVRC-] (R : sonant /l, r, m, n, /)
- IV [CVR-]
- V [CVC-]
- VI [CVC-/CVR-] (this class is the mixture of Classes IV and V)
- VII (reduplicated word forms)

Variant Type of Word-Base Structure

Proto-typical forms will make Variants according to various conditions. The variants may be phonetic ones (VL type; Contracted type; Metathesis type; /ū/ type) or lexico-morphological ones (Aorist-present type; Weak-present type; Reduplicated type). It happens in classes as follows:

- Class I [VL type; Contracted type]
- Class II [VL type; Contracted type; /ū/ type]
- Class III [VL type; Metathesis type; Aorist-present type;]
- Class IV [Aorist-present type]
- Class V [VL type; Contracted type; Weak-present type]
- Class VI [VL type; Weak-present type]
- Class VII [Reduplicated type; Contracted type]

In this paper, the full data of OE strong verbs are collected and described systematically in these types. The author further put importance on the “rhyme structure” which is the basis of conjugation in speakers’ mind, both to maintain normal strong forms and to produce new strong forms.

Keywords: Old English, Strong verb, Class definition, Rhyme structure, Proto-types and the variants